

『高校教育研究』の意義

学校長 大谷 実

本校の研究紀要『高校教育研究』も第65号を数えます。本紀要は、本校の歴史そのものであります。終戦間際、わが国で第三番目に設立された高等師範学校である金沢高等師範の付属を母体とする本校は、その草創期から日本海側で唯一の官立の附属高等学校として、将来の我が国や世界をリードする人を育成することを使命とし、来るべき世界の動向を視野に入れつつ、高校教育の本来的な在り方や、先見的な、そして時には革新的な試みや提言などを毎年発信し続けてまいりました。本紀要は、公立・県立・私立の高等学校とは異なり、研究推進校としての独自の役割を担うべく、実践家であり研究者でもある本校教員が、広い視野と深い見識に基づき、日々継続して取り組んできた研究と実践の努力の結晶であります。本紀要所収の論文は、経験的主観を綴った実践報告でも現実味に乏しい空虚な言説でもなく、直面する現実的な教育課題と明確な理論的視野を兼ね備えた、理論に裏付けられた実践報告、実践を導く理論的提案であります。生徒の学びに敏感であること、すなわち観察される生徒の活動に意味を与え、より価値ある方向に誘う深い見識（理論）を持つことが教師に求められており、本紀要はそうした教師の資質・能力の向上に寄与するものと期待しています。本紀要所収の各論文が、それぞれの専門分野の進歩にいささかでも貢献でき、さらなる研究を触発する一助となりますならば、これほど喜ばしいことはありません。各論文に対しまして、読者の皆様からの忌憚のないご箴言やご批判を賜りますようお願い申し上げます。

今、教育研究は難しい局面にあるように思われます。学校現場における研究紀要では、理論に裏付けられた実践報告、実践を導く理論的提案は少なくなっているように感じます。教科の陶冶的価値の探究や深い教材研究に基づく授業研究は少なくなり、言語活動やグループ学習等の授業の手段に関心が向いています。また、学校や教員共同体の内発的動機付けによる教育研究というよりも、教育行政の主導下の外発的動機付けのもとで、学力向上に向けたPDCAサイクルを実施することに腐心しており、時には、学力調査の類似問題を解く経験を積ませて、1ポイントでも課題のあった問題の正答率を上げることで、よい順位を維持しようとする競争主義・成果主義が蔓延しているように感じます。実際、学校研究紀要を拝見しますと、「本校の学力は全国平均・県平均より何ポイント高い。」という統計が散見されます。豊かな学習環境の中で、生徒の思考力、判断力、表現力等の真正な学力を育成するという理想は、行動主義的な経験の強化を通じた機械的・再生的な勉強にすり替えられ、教師は教育者からトレーナーやコーチに成り代わってしまった感があります。スタンフォード大学のシュールマン教授の“He who can, does. He who cannot, teaches.”という格言が耳が痛いのは私だけではないように思います。「生きる力」の指標であるPISA調査で、我が国やアジア圏が軒並み上位を占めていることを手放しで喜んではいけないように思います。

本校の教師は、生徒と水平で対等な関係をつくり、生徒一人ひとりの個性や才気を看取り、それぞれの真骨頂を伸ばすことを大切にしています。そして、人格陶冶に対する教育内容の価値を意識し、深い教材研究に基づき独自の教材を開発し、教科や総合的な学習の時間において真正な学問的知見を提供することを通して、生徒たちが真理探究の厳しさと喜びを経験し、未来への夢と展望をもてるような教育を行おうとしています。本校の研究紀要を通して、こうした本校の伝統と特色の一端を感じていただければこの上ない幸いです。